

## 構文の認知と語彙項目の選択 (1)

平澤 洋一

### 1. 語彙選択の調査

ある日本語の構文を捉えて私たちが語彙選択をおこなう場合に、それはどの程度の正確度と個人差をとともなって実現されるのであろうか。また、それは日本人と外国人とで、どの程度の違いが見られるのであろうか。このような構文構造と語彙選択の実態を明らかにするため、平成8年7月に予備調査をおこなった。被験者は56名(短大生47名, 外国人留学生9名)。語彙選択の回答は複数方式, 対象にした語彙は移動動詞群から選んだ12語(アガル, ノボル, ウク, ウカブ, サガル, クダル, オリル, オチル, シズム, イク, クル, トオル)である。この12語の有する構文構造と文法的意味特徴(文法的意味レベルにおける意味特徴)の関係については、論じたことがある<sup>(1)</sup>。概略的にいえば、アガル・オリル・オチルは垂直で速い移動に使う。速いからマイアガル・カケアガル・カケオリルと使える。オリルの移動主体は行為者格, オチルは対象格が多い。ウク・ウカブも垂直の移動であるが、浮力が関与してくる。垂直/前方への移動はノボルとクダルが担い、サガルは垂直/前方/後方への移動を表せる。

今回の調査はその語彙の選択と構文認知の実態と類型の把握を主目的にしたもので、地域差や民族差などとの相関性の解明を長期的な目的とする。調査文と日本人被験者の回答数を以下に示す(NRは無回答, 複数は複数回答)。

#### (1) アガル/ノボル

- S<sub>1</sub> 女は急いで(アガっていった37/ノボっていった15)。複数5  
 S<sub>2</sub> 小学生が歩いて富士山に(アガル0/ノボル47)。  
 S<sub>3</sub> 船が2時間かけて川を(アガル2/ノボル46)。複数1  
 S<sub>4</sub> さっと5, 6人の手が(アガった46/ノボった1)。  
 S<sub>5</sub> 男性社員が50階建て高層ビルの屋上までゆっくり歩いて(アガル15/ノボル38)。複数6  
 S<sub>6</sub> 男性社員が50階建てビルの屋上まで直通エレベーターで一気に(アガル47/ノボル3)。

## 複数3

- S<sub>7</sub> 風船が空に舞い (アガル47/ノボル0)。  
 S<sub>8</sub> 煙突から煙がゆっくり (アガッていく8/ノボッていく42)。複数3  
 S<sub>9</sub> 物価が (アガッた47/ノボッた1)。複数1  
 S<sub>10</sub> 子供が風呂から (アガル47/ノボル0)。  
 S<sub>11</sub> 子供が学校に (アガル47/ノボル0)。  
 S<sub>12</sub> 雨が (アガル47/ノボルのぼる0)。  
 S<sub>13</sub> 経営不振が噂に (アガッた13/ノボッた31)。NR3  
 S<sub>14</sub> 牛肉の刺身が食卓に (アガル32/ノボル13)。NR2  
 S<sub>15</sub> 能率が (アガル47/ノボル0)。  
 S<sub>16</sub> 犯人が (アガル47/ノボル0)。

## (2) オリル/サガル/クダル/オチル

- S<sub>17</sub> 父が3階からゆっくり (オリてくる47/サガッてくる0/クダッてくる0/オチてくる0)。  
 S<sub>18</sub> 子供が階段を (オリル47/サガル0/クダル5/オチル1)。複数6  
 S<sub>19</sub> 半日かけて船が川を (オリル1/サガル0/クダル47/オチル0)。複数1  
 S<sub>20</sub> 右肩が (オリている3/サガッている44/クダッている0/オチている9)。複数9  
 S<sub>21</sub> 畑に霜が (オリている47/サガッている0/クダッている0/オチている0)。  
 S<sub>22</sub> 壁に大きな看板が (オリている1/サガッている47/クダッている0/オチている0)。複数1  
 S<sub>23</sub> 木の葉が地面に (オリル0/サガル0/クダル0/オチル47)。  
 S<sub>24</sub> 車が崖の下へ (オリていった0/サガッていった0/クダッていった3/オチていった47)。複数3  
 S<sub>25</sub> 汚れが (オリル0/サガル0/クダル0/オチル47)。  
 S<sub>26</sub> スターが映画の主演を (オリル47/サガル1/クダル0/オチル3)。複数4  
 S<sub>27</sub> 物価が (オリた0/サガッた46/クダッた0/オチた6)。複数5  
 S<sub>28</sub> 弟が試験に (オリル0/サガル0/クダル0/オチル47)。  
 S<sub>29</sub> 熱が (オリル0/サガル47/クダル0/オチル0)。  
 S<sub>30</sub> 命令が (オリた5/サガッた0/クダッた47/オチた0)。複数5

## (3) ウカブ/ウク/シズム

- S<sub>31</sub> 木の葉が水面に (ウカンでいる39/ウイでいる20/シズンでいる0)。複数12

- S<sub>32</sub> 水面に魚が (ウカンでいる24/ウイでいる33/シズンでいる0)。複数10  
 S<sub>33</sub> 空に雲が (ウカンでいる41/ウイでいる13/シズンでいる0)。複数7  
 S<sub>34</sub> 水中にゴミが (ウカンでいる13/ウイでいる47) <水中にゴミが浮遊している>。複数13  
 S<sub>35</sub> 海の底に船が (ウカンでいる1/ウイでいる0/シズンでいる46)。  
 S<sub>36</sub> (電車の衝突で) 体が宙に (ウカんだ2/ウイた47/シズんだ0)。複数2  
 S<sub>37</sub> 娘の姿が目 (ウカブ47/ウク0/シズム0)。  
 S<sub>38</sub> 名案が (ウカブ46/ウク2/シズム0)。複数1  
 S<sub>39</sub> 犯人像が (ウカブ44/ウク1/シズム0)。NR 2  
 S<sub>40</sub> 歯が (ウカブ1/ウク47/シズム0)。複数1  
 S<sub>41</sub> 課長は組織の中で (ウカンでいる0/ウイでいる47/シズンでいる0)。  
 S<sub>42</sub> 女が物思いに (ウカブ0/ウク0/シズム47)。

#### (4) イク/クル/トオル

- S<sub>43</sub> 社員がすぐそちらへ (イク47/クル3/トオル0) 予定です。複数3  
 S<sub>44</sub> このバスは東京を (イク1/クル0/トオル47)。複数1  
 S<sub>45</sub> こちらへ電話が (イット0/キタ47/トオット1) ところだ。複数1  
 S<sub>46</sub> 子供たちが向こう岸まで川を泳いで (イク46/クル0/トオル5)。複数4  
 S<sub>47</sub> 子供たちが下流にむかって川を泳いで (イク44/クル0/トオル0)。NR 3  
 S<sub>48</sub> バスがトンネルを (イク0/クル0/トオル47)。  
 S<sub>49</sub> あなたはすぐこちらへ (イッて2/キ47/トオッて0) ください。複数2  
 S<sub>50</sub> 船が海にしずんで (イク47/クル1/トオル0) のが窓から見えた。複数1  
 S<sub>51</sub> 村に鉄道が (イット0/キタ3/トオット47)。複数3  
 S<sub>52</sub> 意見が (イク0/クル0/トオル47)。  
 S<sub>53</sub> 子供が試験に (イク0/クル0/トオル43) <合格する>。複数5  
 S<sub>54</sub> (頼んだとおりにやってくれないので) 課長は頭に (イット0/キタ47/トオット0)。  
 S<sub>55</sub> 大きな波がこっちへ (イク0/クル47/トオル0)。  
 S<sub>56</sub> 声がよく (イク0/クル0/トオル47)。

## 2. 意味特徴と構文

アガルとノボルでは「主体が出発点から到着点まで移動する」という点で共通の意味特徴をもち、「山をノボル」「川をノボル」のように、移動場所としての「～を」をとることが多い。これ

は、垂直方向への移動が重視されるとアガル、上方+前方という方向になるとノボルになるという、もともとの意味領域の違いが反映された結果によるのであろう。ウクとウカブは液体の表面を到着点とする上方への移動によく使われるが、ウクは「歯がウク」「汚れがウク」のように「密着していたものが離れる」意でも使用可能であり、「ポスターがハガレル」「ペンキがハゲル」といった類の述語に共通する〈密着性を失って〉移動するという意味特徴をもつ。一方、ウカブは「空に白い雲がウカンでいる」のような表現が可能であり、移動が「液体」の中か否かを弁別的特徴にしなければならないような積極的な理由は見当たらない。「空に白い雲がウカンでいる」は、〈浮力を受け〉た感じで雲が空にあり、移動の〈G到着点〉としての「空」が焦点化されてウカブが使われた例と思われる。また、「日がシズム」のような使い方もあり、移動が液体の中に限られないのは、シズムも同様である。

移動動詞を述語とする文は、基底構造レベルで次のような文法的意味特徴のいずれか二つ以上を含んでいる。

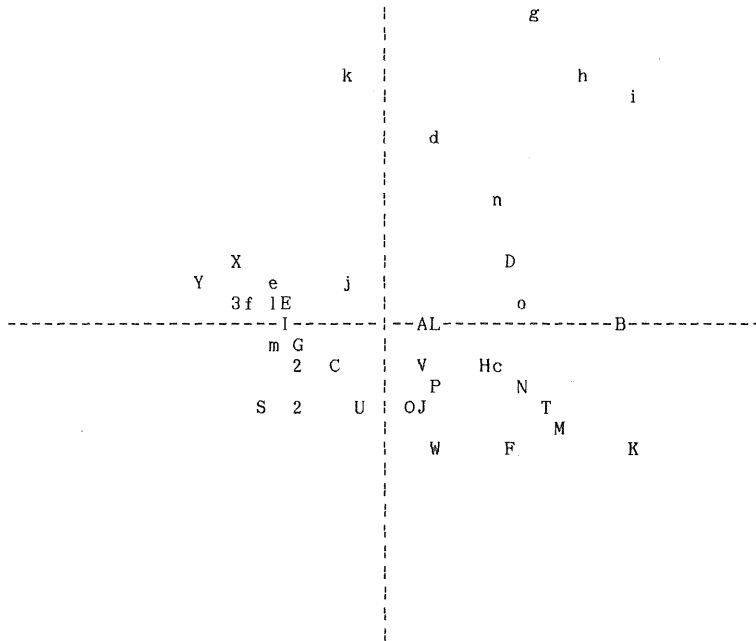
- 〈A〉 = 〈行為者 A gentive〉
- 〈O〉 = 〈対象 O bjective<sup>(2)</sup>〉
- 〈Sr〉 = 〈出発点 S tart〉
- 〈G〉 = 〈到着点 G oal〉
- 〈L〉 = 〈場所 L ocative〉
- 〈D〉 = 〈方向 D irection〉
- 〈D<sub>1</sub>〉 = 〈上方へ〉
- 〈D<sub>2</sub>〉 = 〈下方へ〉
- 〈D<sub>3</sub>〉 = 〈前方へ〉
- 〈D<sub>4</sub>〉 = 〈後方へ〉
- 〈D<sub>5</sub>〉 = 〈発話者の方へ〉
- 〈D<sub>6</sub>〉 = 〈発話者から離れた方へ〉
- 〈Du〉 = 〈時間的長さ・期間 D uration〉
- 〈M〉 = 〈手段 M eans〉
- 〈S〉 = 〈状態 S tate〉
- 〈S<sub>1</sub>〉 = 〈密着性を失って〉
- 〈S<sub>2</sub>〉 = 〈速く〉
- 〈S<sub>3</sub>〉 = 〈時間をかけてゆっくり〉
- 〈S<sub>4</sub>〉 = 〈重力をもろに受け〉
- 〈S<sub>5</sub>〉 = 〈浮力を受け〉
- 〈P〉 = 〈叙述 P redicate〉

表1 調査文 S<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>の基底構造 (日本人, 正答)

調査文	A	O	Sr	G	L	D	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	D <sub>5</sub>	D <sub>6</sub>	Du	M	S	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>4</sub>	S <sub>5</sub>	P	
S1アガル	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	+	
ホル	+	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+
S2ホル	+	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-	-	+
S3ホル	-	+	-	-	+	+	+	-	+	-	-	-	-	+	-	+	-	-	+	-	-	+
S4アガル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	+
S5ホル	+	-	+	+	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S6アガル	+	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	+
S7アガル	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	+
S8ホル	-	+	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
アガル	-	+	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S9アガル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S10アガル	+	-	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S11アガル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S12アガル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S13ホル	-	+	-	+	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S14ホル	-	+	-	+	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S15アガル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S16アガル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S17オリル	+	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S18オリル	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S19クタル	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	+	-	-	+
S20サガル	+	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S21オリル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S22サガル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S23オチル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S24オチル	-	+	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S25オチル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	+	-	-	+
S26オリル	+	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S27サガル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S28オチル	+	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S29サガル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S30クタル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S31ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S32ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S33ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S34ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	+	+
S35システム	-	+	-	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	+	-	+
S36ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	+
S37ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S38ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S39ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S40ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	+
S41ウク	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	+
S42システム	+	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+
S43ウク	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S44トチル	-	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S45ケル	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S46ウク	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S47ウク	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S48トチル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	+
S49ケル	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S50ウク	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S51トチル	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S52トチル	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S53トチル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S54ケル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S55ケル	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S56トチル	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+

図1 基底構造での正答語彙の分布

データの最大値 = .083



33=g	37=k	34=h	35=i	30=d	40=n	24=X	4=D
41=o	9=l	1=A	12=L	2=B	39=m	7=G	26=Z
18=R	21=U	15=O	10=J	20=T	13=M	23=W	6=F
25=Y	31=e	36=j	27=a	28=b	42=p	32=f	38=l
43=q	3=C	22=V	8=H	29=c	16=P	14=N	19=S
11=K	5=E	17=Q					

図2 基底構造での正答語彙体系

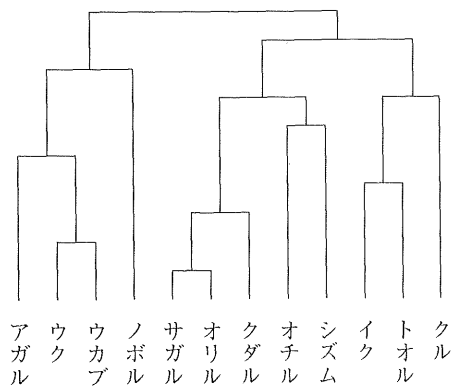


図3 構文構造での正答語彙の分布

データの最大値 = .192

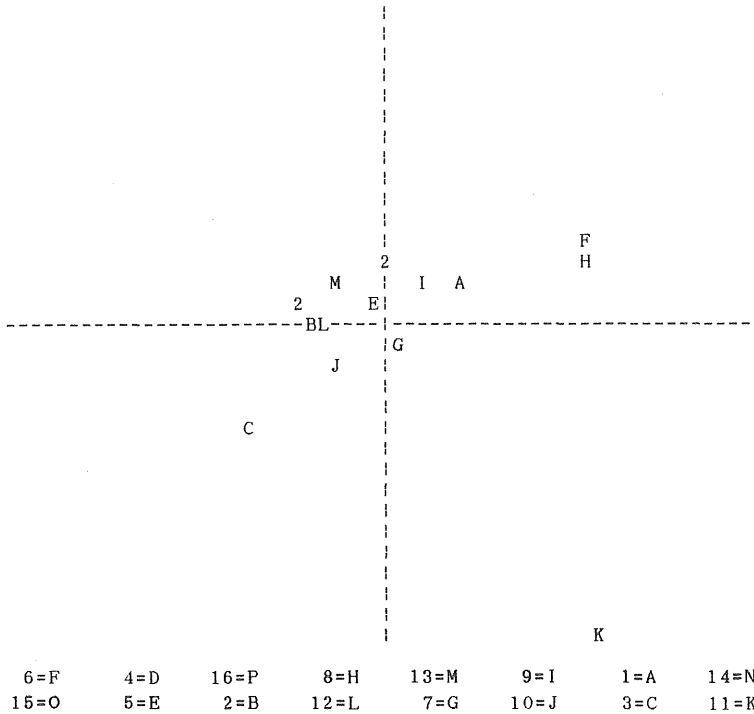


表2 12語基底構造意味特徴の表

動詞	AO	Sr	G	L	D	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	D <sub>5</sub>	D <sub>6</sub>	Du	M	S	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>4</sub>	S <sub>5</sub>	P
①アガル	+	±	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	±	+	-	+	-	-	-	+
②ホル	+	±	±	±	+	+	-	±	-	-	-	±	±	+	-	-	+	-	-	+
③サガル	+	±	±	±	+	+	+	±	±	-	-	±	±	+	-	±	±	-	-	+
④クダル	+	±	±	±	+	-	+	±	-	-	-	±	±	+	-	-	+	-	-	+
⑤オ Ril	+	±	±	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	-	±	±	-	-	+
⑥オキル	+	±	±	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	-	+	-	±	-	+
⑦ウク	+	±	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	±	+	±	±	-	-	±	+
⑧ウカブ	+	±	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	-	+	-	±	-	-	±	+
⑨ジスム	+	±	+	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	-	-	±	±	-	+
⑩イ	+	±	±	±	+	-	-	-	-	-	±	±	±	±	-	±	±	-	-	+
⑪ケル	+	±	±	±	+	-	-	-	-	±	-	±	±	±	-	±	±	-	-	+
⑫トル	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	±	±	±	-	±	±	-	-	+

注 +は重視される特徴、±は選択され焦点化される特徴、-はその他を示す。

これらの意味特徴と調査文例S<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>の正答語形との関係をまとめると表1のようになる。この表のデータを数量化Ⅲ類で分析(併用形のある場合は優勢形で代表させた)してプロット表示すると、図1のようになる。この図からはS<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>に使われた語形の意味的距離を知ることができる。そして、表1から移動動詞12語と意味特徴の関係を統合すると表2となる(AOは基底構造で行為者または対象のどちらかが選択されることを表す略号とする)。さらに、表2をもとに12語をクラスター分析して樹形図で表示すると図2になり、意味的距離を加味した語彙体系





として表示することができる。また、 $S_1 \sim S_{56}$ の正答語形と表層構文構造レベルの文法的意味特徴との関係をまとめると表3（併用形のある場合は優勢形で代表させた）になり、表3を数量化III類で分析しプロット表示したのが、図3である。

### 3. 誤答の原因を探る

語彙の選択間違いはなぜ起きたのであろうか。 $S_1$ 「女は急いでアガっていった」に対する15名の回答である「女は急いでノボっていった」は、「急いで」といっても「走って移動する」くらいの速さでしかないからノボルでも十分に表現できると考えたからであろうか。到達点の「2階」程度の近距離というイメージにとられたようである。これは、基底構造での意味特徴と表層での構文構造の差異の問題、さらにそこから派生的に生成される「文レベルの表象の違い」「文のイメージの違い」の問題にまで関わってくるので、この面からの調査結果を含めて後述する。

$S_3$ の「船が2時間かけて川をノボル」の回答46名に対しアガルの回答が2名あったのは、〈時間的長さ・期間〉の「2時間かけて」が基底構造の意味特徴の〈 $S_2$ 速く〉と相入れないという認知が稀薄だったからであろう。が、アクセントの「反省的型」を探していくときのような注意深い調査を続けていくなら、この2名もアガルを使うと答える可能性が高い。 $S_4$ や $S_8$ は $S_3$ と逆のケースで、ノボルが使えなくなる。そして〈 $S_2$ 速く〉が鮮明に認知されにくくなる「50階建て高層ビルの屋上まで」という設定では、 $S_5$ と $S_6$ に見るとおり回答がバラついてくる。それが「上空1万メートルまで一気に」上昇するとなれば、〈 $S_2$ 速く〉が焦点化されるので、ノボルがまず使えなくなるというわけである。

$S_8$ 「煙突から煙がゆっくりノボっていく」の構文に「アガっていく」を使えると答えた被験者が8名いた。これは構文構造から見てきわめて自然に起きやすい認知パターンに属する。ノボルは基底構造で〈O〉〈Sr〉〈 $S_3$ 〉〈P〉、アガルは〈O〉〈Sr〉〈 $S_2$ 〉〈P〉という意味特徴の連鎖の違いを有するのにも、これが表層の構文構造レベルになると、両者とも〈O〉〈Sr〉〈S〉〈P〉という構造になってしまう。基底構造では異なるのに構文構造では同一構造になってしまう——これが誤用を生む最大の原因と思われる。構文構造は、基底構造レベルの意味特徴の順列組み合わせの数だけ生成されると考えられやすいが、実際には構文上の格配列およびコンテキストからの制限を受けるため、現状ではかなり限定された構文が多用されるにすぎない。アガルは〈前方へ〉、クルは〈発話者の方へ〉という重要な意味特徴を有するが、これらが構文上の格を獲得して、例えば前方格や接近格のような格を形成することはなく、「船が川をノボル」「友達がこっちへクル」のように、場所格や方向格として構文上にあらわれる。

$S_{13}$ 「経営不振が噂にノボッタ」、 $S_{14}$ 「牛肉の刺身が食卓にノボル」では、抽象度がかなり高くなるので、基底構造と構文構造との距離が広がる感じとなるのであろうか、誤答率が高くなり

やすいようである。S<sub>9</sub>「昨年と同じ時期に比べ物価は8%もアガった」は、S<sub>15</sub>などの慣用表現に近い認知になっているからであろうか、誤答は1名にすぎなかった。

上記の移動動詞12語は、〈A行為者〉〈O対象<sup>(3)</sup>〉〈Sr 出発点〉〈G 到着点〉〈L 場所〉〈D 方向〉〈Du 時間的長さ・期間〉〈M 手段〉〈S 状態〉……〈P 叙述〉という基底構造から、いろいろな構文構造を生成できるが、基底構造で使われたすべての意味特徴が格枠を獲得して表層での構文構造を形成するとは限らず、〈D<sub>4</sub> 発話者から離れた方へ〉、〈S<sub>1</sub> 密着性を失って〉、〈S<sub>3</sub> 時間をかけてゆっくり〉などには語彙挿入されないのがほとんどである。調査文S<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>にあらわれる基底構造は次のいずれかである。

1. 〈A 行為者〉〈Sr 出発点〉〈D 方向〉〈D<sub>2</sub> 下方へ〉〈D<sub>3</sub> 前方へ〉〈S 状態〉〈S<sub>3</sub> 時間をかけてゆっくり〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈Sr 出発点格〉〈D 方向格〉〈S 状態格〉〈P 移動〉  
(例) S<sub>17</sub> 父が3階からゆっくりオリてくる。
2. 〈A 行為者〉〈G 到着点〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈M 手段〉〈S 状態〉〈S<sub>3</sub> 時間をかけてゆっくり〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈G 到着点格〉〈M 手段格〉〈S 状態格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>5</sub> 男性社員が50階建て高層ビルの屋上までゆっくり歩いてノボル。
3. 〈A 行為者〉〈G 到着点〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈M 手段〉〈S 状態〉〈S<sub>2</sub> 速く〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈G 到着点格〉〈M 手段格〉〈S 状態格〉移動叙述 (例) S<sub>6</sub> 男性社員が50階建て高層ビルの屋上まで直通エレベーターで一気のアガル。
4. 〈A 行為者〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈L 場所〉〈M 手段〉〈S 状態〉〈S<sub>3</sub> 時間をかけてゆっくり〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈L 場所格〉〈M 手段格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>2</sub> 小学生が歩いて富士山にノボル。
5. 〈A 行為者〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈S 状態〉〈S<sub>2</sub> 速く〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈S 状態格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>1</sub> 女は急いでアガっていった。
6. 〈A 行為者〉〈Sr 出発点〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈Sr 出発点格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>10</sub> 子供が風呂からアガル。
7. 〈O 対象〉〈Sr 出発点〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈S 状態〉〈S<sub>3</sub> 時間をかけてゆっくり〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈Sr 出発点格〉〈S 状態格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>8</sub> 煙突から煙がゆっくりノボっていく。
8. 〈O 対象〉〈G 到着点〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈G 到着点格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>11</sub> 子供が学校にアガル。
9. 〈O 対象〉〈D 方向〉〈D<sub>1</sub> 上方へ〉〈L 場所〉〈Du 時間的長さ・期間〉〈S 状態〉〈S<sub>3</sub> 時間をかけゆっくり〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈L 場所格〉〈Du 期間格〉〈P 移動〉 (例) S<sub>3</sub> 船が2時間かけて川をノボル。
10. 〈O 対象〉〈D 方向〉〈-D<sub>1</sub> 上方へ〉〈S 状態〉〈S<sub>2</sub> 速く〉〈P 叙述〉 ⇒ 〈Su 主格〉〈D 方

向格〉〈P移動〉 (例) S<sub>24</sub>車が崖の下へオチていった。

11. 〈O対象〉〈G到着点〉〈D方向〉〈D<sub>1</sub>上方へ〉〈D<sub>2</sub>前方へ〉〈S状態〉〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくりに〉〈P叙述〉 ⇒ 〈Su主格〉〈G到着点格〉〈P移動〉 (例) S<sub>13</sub>経営不振が噂にノボル。
12. 〈O対象〉〈D方向〉〈D<sub>1</sub>上方へ〉〈S状態〉〈S<sub>1</sub>密着性を失って〉〈P叙述〉 ⇒ 〈Su主格〉〈P移動〉 (例) S<sub>40</sub>歯がウク。
13. 〈O対象〉〈D方向〉〈D<sub>1</sub>上方へ〉〈S状態〉〈S<sub>2</sub>速く〉〈P叙述〉 ⇒ 〈Su主格〉〈S状態格〉〈P移動〉 (例) S<sub>4</sub>さっと5, 6人の手がアガった。
14. 〈O対象〉〈D方向〉〈D<sub>1</sub>上方へ〉〈P叙述〉 ⇒ 〈Su主格〉〈P移動〉 (例) S<sub>9</sub>物価がアガった。
15. 〈O対象〉〈P叙述〉 ⇒ 〈Su主格〉〈P移動〉 (例) S<sub>12</sub>雨がアガル。S<sub>15</sub>能率がアガル。S<sub>16</sub>犯人がアガル。

調査文例の基底構造には、〈S状態〉の中に〈S<sub>1</sub>〉～〈S<sub>5</sub>〉という5種の文法的意味特徴が見られたが、これらにそのまま語彙が挿入されて最終的な構文構造が形成される場合と、語彙は挿入さなくても基底でのおおのの意味特徴の残る場合とがある(後者は形態論上はゆで処理する)。このような規定<sup>10)</sup>を設けることによって、調査文S<sub>1</sub>に対する回答「女は急いでアガっていった」と「女は急いでノボっていった」との違いを意味論の側から説明できるようになる。アガルの意味特徴の中に〈S<sub>2</sub>速く〉があるがために、S<sub>4</sub>「さっと5, 6人の手がアガった」ではアガルが使いやすくなり、これと対照的なS<sub>2</sub>では「歩いて富士山にアガル」と回答した被験者がゼロになったものと思われる。

(15)は、述語と名詞句との意味的熟合度が高まることを根拠に、熟語ないしは慣用句に近い扱いになるのが普通であるが、これらに「猿も木から落ちる」ほどの熟合度ではない。(14)や(15)は、他の構文構造と紛れるおそれがないので、ここでは上記のように扱った。

S<sub>1</sub>～S<sub>56</sub>のうち、語彙の選択間違いが見られた28例の内訳は、アガルとノボルの混同が8例、オリル/サガル/クダル/オチルのそれが7例、ウク/ウカブも7例、イク/クル/トオルが6例である。混同は、基底構造と構文構造における構成要素の違いに起因している。基底構造が表2にみるような21種の意味特徴からなるのに対して、構文構造は表6のような10種の文法特徴で対応しているため、基底構造から構文構造へと意味の構築がなされる過程で、方向を表現する特徴が〈D+D<sub>1</sub>～D<sub>6</sub>〉→〈D〉、状態を表現する特徴が〈S+S<sub>1</sub>～S<sub>5</sub>〉→〈S〉というようにまとめられる現象(これを「特徴の集約」と呼ぶことにする)が起こり、これが意味の混同を誘うのであろう。

具体例で見てみよう。アガルとノボルの混同8例のうち、方向の〈D<sub>3</sub>前方へ〉が強調されてノボルの選択されるのがS<sub>3</sub>, S<sub>8</sub>, S<sub>13</sub>, S<sub>14</sub>の4例であり、同時にこれらの文ではノボルの意

味特徴〈S状態〉の下位特徴である〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり〉も加味されているのだが、これらが〈D+D<sub>1</sub>+D<sub>2</sub>〉→〈D〉, 〈S+S<sub>3</sub>〉→〈S〉と集約されるので、アガルの場合の〈D+D<sub>1</sub>〉→〈D〉, 〈S+S<sub>2</sub>〉→〈S〉との区別がつかなくなってしまうのである。つまり、

ノボル 〈A<sub>2</sub>O〉〈Sr〉〈G〉〈L〉〈D〉〈D<sub>1</sub>〉〈D<sub>2</sub>〉〈M〉〈S〉〈S<sub>3</sub>〉〈P〉  
⇒ 〈Su〉〈Sr〉〈G〉〈L〉〈D〉〈M〉〈S〉〈P〉

アガル 〈A<sub>2</sub>O〉〈Sr〉〈G〉〈L〉〈D〉〈D<sub>1</sub>〉〈M〉〈S〉〈S<sub>2</sub>〉〈P〉  
⇒ 〈Su〉〈Sr〉〈G〉〈L〉〈D〉〈M〉〈S〉〈P〉

となり、基底構造で明らかな差異を持つ構造が、表層レベルの構文構造では特徴が集約されて同一構造になってしまうのである。したがって、混同が起きやすくなる。S<sub>1</sub>は「急いで」という状態格(=文法格の一つ)のことばが述語選択の有力な手がかりになるのに、15名がノボルを選んでいる。また、S<sub>13</sub>やS<sub>14</sub>は出発点から到着点にいたるまでに時間のかかる状態変化であり、ノボルを選択しやすい意味構造であるにもかかわらず、混同率が高くなっている。一方、S<sub>3</sub>では「2時間かけて」という〈Du時間的長さ・期間〉を表すことばが存在するので、方向としての〈D<sub>3</sub>前方へ〉や状態の〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり〉が選択されやすくなり、ノボルと答える率が高くなったのであろう。S<sub>8</sub>も「ゆっくり」があるから、同様である。とくに、S<sub>3</sub>では「船が2時間かけて川を〜」であるから、〈D<sub>1</sub>上方へ〉よりは〈D<sub>3</sub>前方へ〉の重視されることが自明となり、〈D<sub>3</sub>前方へ〉〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり〉が必須になれないアガルは使えなくなるというわけである。さすがに誤答は2名にすぎなかった。S<sub>7</sub>, S<sub>10</sub>, S<sub>11</sub>, S<sub>12</sub>, S<sub>15</sub>, S<sub>16</sub>では、基底構造での意味格が、集約なしで表層の構文構造での文法格になるので、アガルとノボルの混同が起こらない。S<sub>2</sub>では〈M手段〉の「歩いて」と〈L場所〉「富士山」が〈S状態〉〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり〉との照応を容易にするので誤答はなく、S<sub>4</sub>でも〈S状態〉〈S<sub>2</sub>速く〉の「さっと」があるので混同は1例にすぎない。以上をまとめると、アガルとノボルの混同は、〈D<sub>3</sub>前方へ〉ないしは〈S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり〉の有無に起因するということになる。

オリル/サガル/クダル/オチルについては、どうであろうか。S<sub>19</sub>ではクダルしか使えない。オリルは基底構造で〈S状態〉〈S<sub>2</sub>速く〉をもつので、「半日かけて船がオリル」とは使えないというわけである。S<sub>20</sub>の「右肩がサガっている」は、対象物の下方への垂直移動の結果だけを問題にしているので、〈A行為者〉の行動を表現するオリルや〈S<sub>4</sub>重力をもらに受け〉をもつオチルでは、非文ないしは非文に近いものとして認知される。サガルとオチルは似ているが、サガルが「垂れ幕がサガっている」「物価がサガル」「後ろにサガル」のような用法をもち、移動が重力の方向に限定されないのに対して、オチルは「車が崖にオチル」「木の葉がオチル」などの使い方があるから、〈D方向〉〈D<sub>2</sub>下方へ〉〈S状態〉〈S<sub>2</sub>速く〉〈S<sub>4</sub>重力をもらに受け〉などが欠かせない。S<sub>18</sub>「階段をオリル」のオリルは〈A行為者〉〈L場所〉〈D方向〉〈D<sub>2</sub>下方へ〉〈S状態〉〈S<sub>2</sub>速く〉〈P叙述〉、クダルは〈A行為者〉〈L場所〉〈D方向〉〈D<sub>2</sub>下方へ〉〈D<sub>3</sub>前方

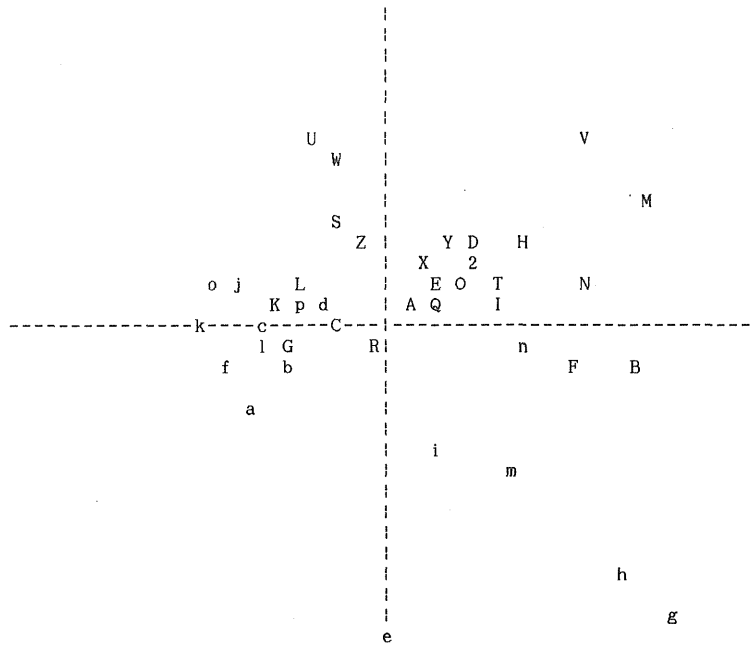
表4 調査文 S<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>の基底構造 (日本人, 正答+誤答)

調査文	A	O	Sr	G	L	D	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	D <sub>5</sub>	D <sub>5</sub>	Du	M	S	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>4</sub>	S <sub>5</sub>	P	
S1アカル	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	+	
ホル	+	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-	-	+
S2ホル	+	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-	-	+
S3*アカル	-	+	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S4*ホル	-	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S5*アカル	+	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S6*ホル	+	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S7アカル	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	+
S8ホル	-	+	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
アカル	-	+	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S9*ホル	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S10アカル	+	-	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S11アカル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S12アカル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S13*アカル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S14*アカル	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S15アカル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S16アカル	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S17オリル	+	-	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S18*クタル	+	-	-	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
*オチル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S19*オリル	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S20*オリル	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
*オチル	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S21オリル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S22*オリル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S23オチル	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S24*クタル	+	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S25オチル	-	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+	+	-	+	-	-	+
S26*サカル	+	-	+	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S27*オチル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	+	-	-	+
S28オチル	+	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S29アカル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S30*オリル	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S31ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S32ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S33*ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S34*ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S35*ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S36ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	+
S36ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S37ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S38*ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S39*ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S40ウカア	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S41ウカ	-	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-	+
S42システム	+	-	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+
S43*カル	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-	+
S44*イウ	-	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S45*トオ	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S46*トオ	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S47イウ	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S48トオ	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S49*イウ	+	-	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S50*カル	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+
S51*カル	-	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S52トオ	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S53トオ	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S54カル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S55カル	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S56トオ	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+

注 \*は誤答語形を示す。

図4 基底構造での誤答語彙の分布

データの最大値 = .084



21=U	22=V	23=W	13=M	19=S	26=Z	25=Y	4=D
20=T	14=N	11=K	42=p	30=d	1=A	17=Q	9=I
6=F	2=B	27=a	35=i	39=m	34=h	33=g	31=e
8=H	24=X	10=J	16=P	41=o	36=j	12=L	5=E
37=k	29=c	3=C	38=l	7=G	18=R	40=n	32=f
15=O	28=b						

図5 基底構造での誤答語彙体系

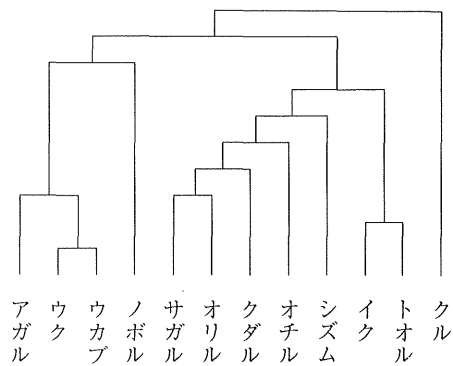


図6 構文構造での誤答語彙の分布

データの最大値 = .215

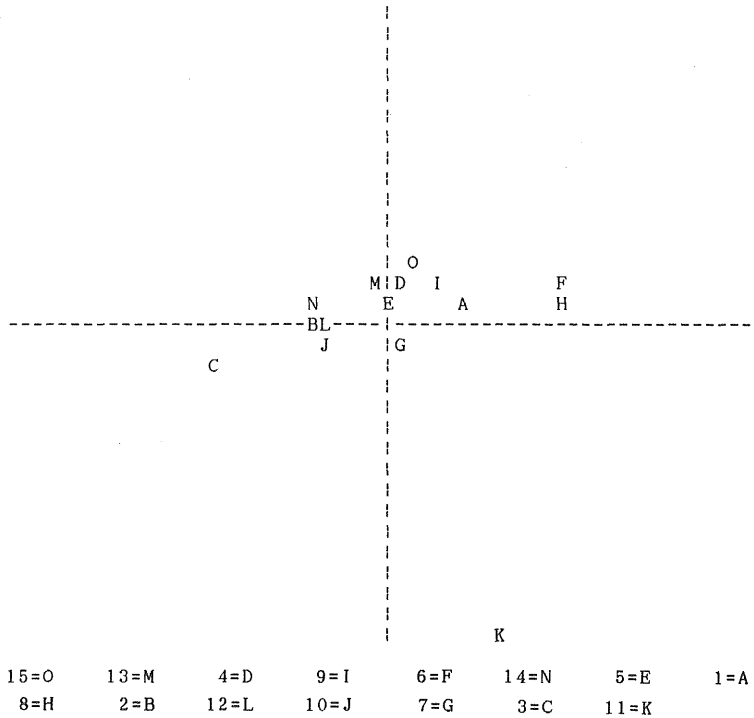


表5 移動動詞12語の基底構造意味特徴（正答+誤答）

動詞	AO	Sr	G	L	D	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	D <sub>5</sub>	D <sub>6</sub>	Du	M	S	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>3</sub>	S <sub>4</sub>	S <sub>5</sub>	P
①アカ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	±	+	-	+	-	-	-	+
②ホ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	+	-	±	-	-	-	±	±	+	-	-	+	-	-	+
③サカ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	-	+	±	-	-	-	±	±	+	-	±	±	-	-	+
④クダ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	-	+	±	-	-	-	±	±	+	-	-	+	-	-	+
⑤オ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	-	±	±	-	-	+
⑥オ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	±	±	±	+	-	+
⑦ウ <sup>ク</sup>	+	±	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	±	+	±	±	±	-	-	+
⑧ウカ <sup>ブ</sup>	+	-	±	±	+	+	-	-	-	-	-	±	±	+	-	±	-	-	-	+
⑨シズ <sup>ム</sup>	+	-	+	±	+	-	+	-	-	-	-	±	±	+	-	±	±	+	-	+
⑩ウ <sup>ク</sup>	+	±	±	±	±	-	-	-	-	-	-	±	±	±	-	±	±	-	-	+
⑪カ <sup>ル</sup>	+	±	±	±	+	-	-	-	+	-	-	±	±	±	-	±	±	-	-	+
⑫オ <sup>ル</sup>	+	-	-	±	-	-	-	-	-	-	-	-	±	±	-	±	±	-	-	+

注 +は重視される特徴、±は選択され焦点化される特徴、-はその他を示す。

へ) <S状態> <S<sub>3</sub>時間をかけてゆっくり> <P叙述>, オチルは普通は <O対象> <L場所> <D方向> <D<sub>2</sub>下方へ> <S状態> <S<sub>2</sub>速く> <S<sub>4</sub>重力をもらに受け> <P叙述> であり, 4語は容易に弁別されるのに, 表層の構文構造では3語とも <Su主格> <L場所> <P移動> となるので, 混同が起きて当然である。

ウク/ウカブは混同が7例。S<sub>40</sub>歯がウクでは, <O対象> <S状態> <S<sub>1</sub>密着性を失って> <P叙述> ⇒ <Su主格> <P移動> となり, 基底構造に比べて構文構造がきわめて単純になる

表6 S<sub>1</sub>~S<sub>56</sub>の構文構造 (日本人, 正答+誤答)

調査文例	Su	O	Sr	G	L	D	Du	M	S	P
S1アガル	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+
ホ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+
S2ノホ`ル	+	-	-	-	+	-	-	+	-	+
S3*アガル	+	-	-	-	+	-	+	-	-	+
S4*ノホ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+
S5*アガル	+	-	-	+	-	-	-	+	+	+
S6*ノホ`ル	+	-	-	+	-	-	-	+	+	+
S7アガル	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+
S8ノホ`ル	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+
アガル	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S9*ノホ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S10アガル	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S11アガル	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+
S12アガル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S13*アガル	+	-	-	+	-	-	-	-	+	+
S14*アガル	+	-	-	+	-	-	-	-	+	+
S15アガル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S16アガル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S17オ`ル	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+
S18*クタ`ル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
*オ`ル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S19*オ`ル	+	-	-	-	+	-	+	-	-	+
S20*オ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
*オ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S21オ`ル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S22*オ`ル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S23オ`ル	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S24*クタ`ル	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+
S25オ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S26*サガ`ル	+	-	+	-	-	-	-	-	-	+
S27*オ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S28オ`ル	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+
S29サガ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S30*オ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S31ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
ウク	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S32ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
ウク	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S33*ウク	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S34*ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S35*ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S36*ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S37ウカア`	+	-	-	+	+	-	-	-	-	+
S38*ウク	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S39*ウク	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S40*ウカア`	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S41ウク	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+
S42シズ`ム	+	-	-	+	-	-	-	-	+	+
S43*カ`ル	+	-	-	+	-	+	-	-	-	+
S44*イ`ク	+	-	-	+	-	+	-	-	-	+
S45*ト`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S46*ト`ル	+	-	-	-	+	-	-	+	-	+
S47イ`ク	+	-	-	-	+	+	-	+	-	+
S48ト`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S49*イ`ク	+	-	-	+	-	+	-	-	+	+
S50*カ`ル	+	-	-	+	-	+	-	-	-	+
S51*カ`ル	+	-	-	+	-	-	-	-	-	+
S52ト`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+
S53ト`ル	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+
S54カ`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+
S55カ`ル	+	-	-	+	-	+	-	-	-	+
S56ト`ル	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+

注 \*は誤答語形を示す。



が、混同は1例しか生じていない。基底構造ですでに〈S状態〉〈S<sub>1</sub>密着性を失って〉がしっかり認知されていることの証左といえよう。

イク／クル／トオルでは、S<sub>49</sub>での回答で「すぐこちらへ行ってください」が2例あた。メモ用紙か案内図でも相手に見せながらS<sub>49</sub>を言っているイメージでも被験者は頭に描いたのであろう。

S<sub>1</sub>～S<sub>56</sub>のうち、語彙の選択間違いが見られた28例は、語彙体系の構築にどのような影響を与えるのであろうか。S<sub>1</sub>～S<sub>56</sub>の調査文に対して回答が正答の場合は正答語形を、誤答語形が回答された場合は誤答語形で代表させて示すと、表4のようになる。その表4のデータを数量化Ⅲ類で分析（併用形のある場合は優勢形で代表させた）してプロット表示すると、図4を得る。そして、表4から移動動詞12語と意味特徴との関係統合すると表5となる（AOは基底構造で行為者または対象のどちらかが選択されることを表す略号とする）。さらに、表5をもとに12語をクラスター分析して樹形図で表示すると図5である。構文構造レベルでの正答・誤答形と文法特徴との関係をまとめたのが表6、そのデータを数量化Ⅲ類で分析してプロット表示させたのが図6である。

### 3. 文イメージの個人差

S<sub>2</sub> 歩いて富士山に（アガル0／ノボル47）。

S<sub>3</sub> 2時間かけて船が川を（アガル2／ノボル46）。複数1

S<sub>57</sub> 女は駅の階段をかけ（アガっていった37／ノボっていった15）。複数5

上記S<sub>57</sub>ではノボルを選択する被験者（日本人も外国人も）が混在するのには、S<sub>2</sub>では全員が迷うことなくノボルを選択するのは、なぜか。S<sub>2</sub>の文を見たとき、歩いて富士山に上る行為が必然的に行為者の時間と汗と忍耐とを伴う行為であることを被験者は容易に表象化することができるのに対し、S<sub>57</sub>では行動が抽象的にしか表現されていない。つまり行為者としての女がどのくらいのスピードで階段を移動していくのか、手に重い荷物をいくつも持っているのか手ぶらなのか、女は若いのか年輩者なのか、といった一切の具体情報の提示がなされていないので、駅の階段を移動していく女の表象を描くのに、ためらいを伴う若干の時間がかかるのであろう。

S<sub>3</sub>の場合でも、S<sub>57</sub>ほどには顕著ではないものの、語彙選択のばらつきが観察された。「2時間かけて」「船で」という制限があるので簡単にノボルが選択される場所であるが、これらを焦点化させずに〈S<sub>3</sub>（時間をかけてゆっくり）〉という情報を受け止めて表象させた被験者は、無意識のうちに「船」を「舟」に置換させ、船頭が竿を操る舟が静かに滑るように川を上っていく、などと捉えたようである。

人間の認知と表象と語彙の選択との間には、どの程度のバリエーションと相関性が存在するの

であろうか。このことを検証するため、S<sub>57</sub>「女は駅の階段をかけ（アガっていった／ノボっていった）」について被験者に認知の過程を答えてもらった。

- (ア) アガっていった37名／ノボっていった15名、複数5名。
- (イ) 女の年齢はいくつくらいか。→15～19歳くらい3名、20歳くらい6名、21～25歳くらい29名、26～29歳くらい6名、30歳くらい3名。<被験者たちは自分と同世代の若い女をイメージしている>
- (ウ) 女は手に重い荷物を持っていたか、手ぶらだったか。→持っていた40名、持っていない7名。持ち物はハンドバッグ19名、ショルダーバッグ10名、ポストンバッグ5名、大きい袋2名、手さげ袋2名、リュック1名、白い花束1名。
- (エ) どのくらいの長さの階段か。→3mくらい1名、5～9mくらい8名、10mくらい12名、11～15mくらい11名、16～20m7名、30mくらい6名、50mくらい2名。<10～15mはないと勢いよく駆け上がるイメージにならない>
- (オ) 女は上から降りてくる人に軽くぶつかりながら勢いよく移動していったか。→はい13名、いいえ34名。
- (カ) 季節はいつ頃か。→1～3月が7名、4～6月10名、7～9月5名、10～12月25名。<表象力が弱いためか、被験者がごく最近のできごとを思い出したためか、調査時期と同じシーズンを回答する者が多かった>

上記の結果を見ると、被験者の頭に表象のすぐ浮かんでこない刺激（＝この場合は言語情報）に対しては、無意識のうちに意味処理のための中間構造が顕在化して、意味の分節と構成要素の選択を行い、その結果を命令情報として記憶弧に送るといような働きをしているらしいことを思感させられる。その中間構造が存在するとすれば、(a)聴覚映像と記号ノリモノが結合した初期構造と(b)構文の格配列に語彙が挿入された深層構造との中間にでも位置するのであろうか。

<注>

- (1) 拙著『日本語語彙の研究』（武蔵野書院）平成8年10月。基底構造の意味特徴は、今回の調査結果から帰納させ、一部設定し直した。
- (2) ここでいう〈対象O bjective〉は、〈行為者A gentive〉とともに構文にあらわれるときには最終的な構文上では対象格、また〈行為者A gentive〉が存在しない構文で使われる場合には主格として生成される要素とする。
- (3) (A)X(O)はAかOのどちらかが選択されることを表す。
- (4) 表1の意味枠のいくつかについて、上記(1)での扱いを改めた。
- (5) 日本語の動詞全体の基底構造に関する意味特徴を設定して論じる必要があるが、アガル・ノボルの基底構造を含め、今後の重要な課題である。